

# 持続する地場産業としての吉野製箸工業協同組合の取組み

尾形浩一郎

キーワード：地場産業、割箸、林業、製材業、社会情勢の変化と組合の取組み

## (1) はじめに

わが国の地域開発政策では、地域産業の活性化を図り、地方生活圏の確立を目指していくことが重要課題として挙げられている。1962年から策定され、現在第五次に及んでいる全国総合開発計画は、時代ごとに地域間の不均衡状態（地域間格差）の是正を試みるものであった。こうした地域開発政策は、方針に基づいて資金の配分を伴うが、それによって期待されるものは、地域の住民の生活の安定と安心である。すなわち、その地域の水準に合わせた安定的な水準の確保であり、災害や生活困難の不安から解放されることである<sup>1</sup>。

住民の生活の安定と安心をもたらすべく行われる地域開発政策は、地方への定住を促す政策と、それに付随する実質的な効果としての地域経済、地域社会の確立が無ければならない。しかし、現状では地方での産業の空洞化、人口の流出による地域社会の崩壊などが叫ばれ続けている。こうした状況に対して、地域に求められる産業、地場産業の果たす役割とはどのようなものか。

本論文では地場産業の具体例として、奈良県吉野地方の割箸生産と製箸業者の組合である吉野製箸工業協同組合の取組みを取り上げる。

まず、日本での割箸をめぐる社会的情勢の変化を、(1)経済的側面、(2)文化的側面から取り上げる。(1)では割箸の消費量の変化、輸入量や輸入相手国の変化、国内の割箸生産の衰退などについて見る。(2)では、1980年代から数度にわたって注目を浴びた、割箸の是非をめぐる論争と、その内容の変遷について見る。

次に、国内の割箸生産地の中でも製材端材の背板を用いた特殊な生産を行っている吉野地方の割箸生産について、その生産工程や関連する産業などと併せて概観する。

最後に、衰退した国内の製箸業界の中で、唯一活発に活動している吉野製箸工業協同組合の活動について、実地の調査を交えて検討する。

吉野製箸工業協同組合の取組みは、単独での生き残り策を模索するものから、吉野という地域全体で、他の産業などとも連携しながらその中での役割を果たそうとするものに変化してきている。

---

## 参考文献

<sup>1</sup> 村山研一、川喜多喬（編）「地域産業の危機と再生」1990年、pp.250,251